

奇妙な海底生物になぜ関心？

謎ナゾ かがく

含む脊索動物門に比較的近い新しい動物門に分類する動きが出ている。

スウェーデンの海底の泥から1878年に最初に発見され、1949年に詳しく報告された。どのように成長しているの

を調べ、珍渦虫の幼生を世界で初めて確認した。

幼生は楕円形で0・2ミリの程度。口や目、手足などはなかった。体の表面にある繊毛を使い、回りながら泳いでいた。体内には消化器官になると

見られる球形の細胞があった。筋肉細胞や神経細胞は少ないが成体とほぼ同じ位置に見られた。

幼生は5日ほどたつと、筋肉を使って体を伸縮させたり水槽の底をはったりした。エサを食べず、卵の栄養を体内に蓄えて育つ。成体は精巣や卵巣のような生殖器官は

できるところは観察できなかったという。

単純な体の構造が、進化生物学者の興味をかきたてる。動物全体の共通祖先の解明につながる可能性があるからだ。

中野助教らは2011年、DNAの分析から、珍渦虫はヒトを含む脊索動物門に比較的近いとする研究をまとめ、珍渦虫と無腸類からなる新しい動物門を提唱した。珍渦虫の成長過程から「一人の遠い祖先も珍渦虫のように単純な幼生だったという仮説が有望になる」と指摘する。珍渦虫は今のところ欧州の海でしか見つかっていない。今後、研究チームは日本でも採集を試みる。

動物共通の祖先の可能性

欧州の海底に住んでいる奇妙な海底生物に、世界の進化生物学者が大きな関心を寄せている。その名は「珍渦虫（ちんうずむし）」。目や肛門、生殖器官といった多くの動物が当たり前に持っているはずの器官がなく、極めて単純な体を持つ生き物だ。なぜ、注目されているのか。

かは謎のベールに包まれたままだった。

筑波大学下田臨海実験センターの中野裕昭助教らの国際研究チームは、珍渦虫を繁殖期にあたる真冬にスウェーデンの西海岸の海底100メートルの泥から採取した。現地の海水を入れた水槽で飼うと、多数の卵と幼生のような9匹を発見。DNA



なく、精子や卵が体中に散らばっていた。口に泥をふくみ、栄養分だけを取り込むと考えられている。幼生は8日ほどで死んでしまい、口が

珍渦虫を採取するため、スウェーデンの西海岸で、海底から泥を引き揚げる。幼生（写真左下）の体長は0・2ミリほどだ

（編集委員 西山彰彦）